

8 月 15 日 聖母の被昇天 分かち合い

今日、8 月 15 日は、日本では、お盆の中日であり、また、76 年前に太平洋戦争が終結したことを記念する特別な日です。この戦争によって大きな犠牲を負った多くの方々、そして、まだ紛争が続き、緊張が解けない世界の平和のために、共に祈りましょう。教会は、この日を昔から聖母の祝日、そして、1950 年ピオ 12 世教皇によって定められて以来、聖母の被昇天の祭日として祝ってきました。救い主イエス・キリストの母になるよう選ばれた聖マリアが、キリストの受難の最も近くにおられ、その救いの恵みに誰よりも深く与ったことを思い、死後、キリストとともに天の栄光にあげられたことを記念し、主を賛美するのです。

今日の第一朗読には、普段あまり読まれないヨハネの黙示録が選ばれています。黙示録は、1 世紀の終わり、教会が地中海世界に広がってゆく中で、様々な困難に出会い、その頂点とも言うべきローマ帝国による厳しい迫害を契機に、当時の状況、そして、それから世界に起きるであろうことを壮大なビジョンで描きだす一種の預言の書です。

今読まれた箇所では、「身に太陽をまとい、月を足の下にし、頭には十二の星の冠をかぶった」女が身ごもって男の子を産もうとしていた、とあります。そして、この女の産む子を襲おうと待ち構えていた竜を避けて、女は荒れ野、つまり、神の用意された場所へ逃げ込むことが読まれました。そして、最後に、「今や、我々の神の救いと力と支配が現れた。神のメシアの権威が現れた」という大きな声が天で聞こえたと記します。この不思議なビジョンを通して、教会は、「教会の母」であるマリアを、そして、あのナザレの乙女から生まれ、十字架で自らを捧げたキリストに従う人々が、神に逆らう力によって追われるものとなりながらも、決して滅ぼされることなく、神の力によって神の玉座に引き上げられる姿を見てきました。黙示録は、迫害下にある信徒たちを慰め、神による最終的な勝利を信じ希望するよう、励ます貴重な文書です。

こうした文書が書かれた時代から 2000 年、わたしたちは全く違った時代、環境の中で生きています。信仰のゆえに生命の危険を感じるようなことはありません。しかし、地域によって、また、状況が変われば、わたしたちの信仰を容認しない社会が生まれないとも限りません。そして、現在、信仰のゆえに、様々な差別や不利益を被って生きる人々がいることも事実です。この人々が、自分たちの信仰を自由に表明し、喜びをもって信仰生活を送ることができるよう祈りましょう。

福音は、みごもって男の子を生む、との告げを受けた乙女マリアがエリザベトを訪問した時の様子を語ります。そして、その時、マリアの口から出た、有名なマリアの賛歌、「マグニフィカト」が読まれました。救い主の母となる栄光ではなく、むしろ、自らの貧しさ、小ささを表明する、婢(はしため)としての告白です。「主は身分の低い、この主のはしためにも目を留めてくださった」「主は思い上がる者を打ち散らし、権力ある者をその座から引き降ろし、身分の低い者を高く上げ、飢えた人を良い物で満たし、富める者を空腹のまま追い返されます。」マリアは、その時だけでなく、聖霊の力によって授かった息子イエスが成長し、秀でた知恵と力を表し、人々から喝さいを受けた時も、人々からそしりを受け、激しい暴言と侮辱

の言葉を浴びせられた時も、じっと耐え、ひとりの貧しい婢としての生き方を貫かれました。十字架のもとにたたずむ数少ない弟子、女性たちの中で、神の計らいを最後まで信じ抜かれたのは聖マリアでした。そのマリアが、十字架のもとで、ヨハネが代表する「教会の母」となる恵みを受け、さらには、被昇天の恵みをお受けになったのは、まさに、そのような生き方に対する神のこたえだと言ってもよいでしょう。

聖母の被昇天をお祝いする今日、わたしたちも聖母の模範に倣い、いただいた恵みの大きさを忘れることなく、与えられた使命を忠実な僕として果たし、聖パウロが語る主が備えてくださる復活の恵みに、いつの日か、共に与ることができるよう恵みを祈りましょう。(S.T.)